『開目抄』等に寿量品を知らざれば久遠の仏・久遠の父を知らず、又、子の子たることを覚知できない不知恩・不孝の子であると述べた一連の叙述は、寿量品の世界に釈尊と我等の根源的有縁性、即ち父子関係が存する所以をみられたからであり、釈尊は親父・慈父であるとて親徳を標榜されて帰敬された理由がここに存したのである。

日蓮聖人遺文引用説話の一考察

——安心の側面より——

西片元證

以前、二・三の考察により成仏への唯一の直道たる行に即して、安心が存在することを考えてみた。日蓮聖人（以下、聖人と略記）に於いてその行は理想的人間の行動規範を示唆するものであり、逆にその行動規範にはずれる行為は安心とは結びつかないものであった。この聖人の示した行法は妙法五字の受持に集約され、さらに四威儀に通ずるものと考えられる。本稿では説話を素材として、受持を具体的に捉え、受持における成仏の確実性、そして、理想的人間の規範を確認してみたい。さて、聖人の説話引用は一種の話でも種々の角度より活用され、異なる論旨を持つ場合もある。故に、使用意図による分類・整理を経て考察せねばなるまい。

分類、整理には種々の方法を想定できようが、ここでは(A)法華経至上主義に立脚した倫理観、(B)法華経・法華経に帰依することの功徳、(C)法難等の色読に関すること、としたい。すなわち、(A)の法華経至上主義に立脚した倫理観の項で理想的人間の規範を求め、さらに全体を通し、特に(C)の法難等色読に関する項を中心として成仏の確実性を考えてみたい。

(A)法華経至上主義に立脚した倫理観

ここでは親子関係を語ったものとして、浄蔵・浄眼と妙荘厳王、目連とその母、烏龍・遣龍等の話が挙げられる。主従関係については阿闍世王と耆婆大臣、紂王と比干等の話があり、師弟関係では尹伊と堯王、務成と舜王、大公望と文王、老子と孔子について述べられている。又兄弟関係は、浄蔵・浄眼、釈尊と提婆達多が前世では摩訶羅王の善友・悪友の二太子であった話がある。夫婦関係にても陳子・相思樹・松浦佐与姫・蘇武等の話を引い

ている。その他、人の和、人間関係の円滑化に関して孔子、周公旦、紂王と周の武王の戦の話がある。最後に報恩について雪山童子、常啼菩薩、薬王菩薩等の話を挙げている。

さて、これ等の説話を通して聖人の倫理観を見ると、報恩に集約されるとも考えられる。聖人の報恩観は、自己及び他を成仏に導くことであり、その独自性は成仏への唯一の直道が法華信仰に存する点であろう。そして、倫理観は法華信仰を基盤として成立するもので、上述の各関係、いずれも他を法華信仰に目覚めさせることを主眼としている。さらに、これ等説話の共通点として、法華信仰の有無を基準とする善因楽果の因果関係の存することが考えられる。

(B)法華経・法華経に帰依することの功徳

ここでは供養の功徳として、阿育王、阿那律、須達長者、薩埵太子、尸毗王、迦葉、喜見菩薩等の話がある。さらに優填王、影賢王の造像の功徳、烏龍・遺龍の写経の功徳、輪陀王と白馬と馬鳴の話等がある。ここでの共通点も(A)と同様、説話の構造に善因楽果の因果関係が存することである。

さて、法華経により済われた例として、提婆達多、阿闍世王、婆瑠璃王、善星比丘、瞿伽梨等の話がある。周知の通り彼等は五逆罪を犯し、地獄に堕ちた。しかし、悪人の代表とも言える彼等でさえ法華経により成仏する事実を以って、檀越達に法華信仰による成仏の確実性を示したものと思われる。

(C)法難等色読に関して

聖人は一生に亘る自己の法華経の行者としての行動を、不軽菩薩をはじめとして、薬王菩薩、雪山童子、付法蔵の諸師等に擬している。この不軽菩薩は釈尊の過去世の姿であり、礼拝行の結果が成仏に至ったのである。

ここにも説話の構造に善因楽果のパターンが見られる。又、法華経中の話に檀越達の姿を重複させた場合もある。例えば、妙一尼、是日尼の姿を提婆品中の檀王の阿私仙に対する給仕として捉えている。又、池上兄弟とその父を浄蔵・浄眼と妙荘厳王に擬している。これ等は皆、善因楽果の構造を有するストーリーの説話である。

ところで、聖人の法華経色読は自己を不軽菩薩と規定することにより成立する。この点より、受持における成仏の確実性を考えてみれば、不軽菩薩の三世は謗法罪、受難、成仏の経過を辿る。一方、聖人のそれは、謗法罪、受難、そして来世は、成仏の確信である。又、檀越につ

いても、先述した妙一尼への書簡中で、成仏の確かなことを保証している。ここに、色読が成仏の因となることを確認できるように思う。(A)、(B)にて触れた善因もこの因果関係に準ずるものと考えたい。

以上、甚だ概略的であるが安心に関すると考えられる遺文中の説話を整理してみた。その結論として次の二点を挙げることができる。

(一)理想的人間の規範については倫理観に関する説話によく表われていた。

(二)成仏の確実性については何れの説話の構造も、悪因苦果、善因楽果であることより、四威儀に通ずる受持が善因となり、そして、楽果に至ることである。

※紙数の都合により註は省略した。

「常不軽品の解釈について」

小野文珖

常不軽品は、法華経の悉有仏性思想の典型的な文とされ、法華信仰の勃興時より今日に至るまで仏性礼拝の実践として尊崇されてきている。仏教思想史を色どる最も著名な教義論争は仏性論争であるが、その一方の雄となった法華一乗の徒の拠り所に、この不軽品の故事があったことは周知の事実である。ところが日蓮聖人は悉有仏性と釈された不軽品から、「仏性」ではなく、「仏種」という教理を構築し、その宗教の中心にすえている。聖人のいう仏種が、それまでの仏性思想と明らかに異った概念をもっていることは、『唱法華題目抄』(二〇四頁)『本尊抄』(七〇六頁)『顕仏未来記』(七四〇頁)『曽谷入道殿許御書』(八九七頁)等、不軽品にふれた諸御書から指摘できる。不軽品からこのように仏性と仏種という両義が生まれる以上、もう一度不軽品の解釈の史的展開をふり返り、そこから聖人の仏種思想を規定せんとする試みも必要なことだと思われる。そこで今回はその基礎的作業として法華思想の潮流の中から、世親・天台・吉蔵・窺基・妙楽・伝教・源信の注釈を概観し、比較検討することにした。

世親は一方では唯識論書を作って、五姓各別の法相派の基を開いた人物であるが、その一方でインド現存唯一の法華経注釈書を残している。そしてこの『法華論』が不軽の礼拝を仏性礼拝と規定したのである。この『法華